

変化 3

高校生・保護者の意識変化

今の高校生の「受験行動」から、 2012年度入試を考える

進研アドが実施した高校新卒者の「受験についての振り返り調査」と、ベネッセコーポレーションの「大学進学に関する調査」から、今の高校生が受験に至るまでの意識と行動について分析する。東日本大震災の影響についても検証し、2012年度入試を受験する高校生像を捉える。

高校区分によって 進路選択時期に差

今の高校生はどのような将来像を描き、進学を意識し、何を重視して受験校を決定しているのだろうか。

進路を決めるうえで必要な10のプロセスについて、いつごろこれを行ったかを高校区分別（進研アドが、高校を大学・短大への進学率・実績の情報をもとに、進学校A、進学校B、中堅校、進路多様校と4分類したもの）に分析したのが図表1である。各プロセスの集計値を各時期で

累積集計し、50%となる時期にプロットした。50%でプロットしたのは、高校生がこれらの進路行動を決める前に必要な情報を大学から提供することが重要であり、広報するタイミングとして一つの目安になるからである。

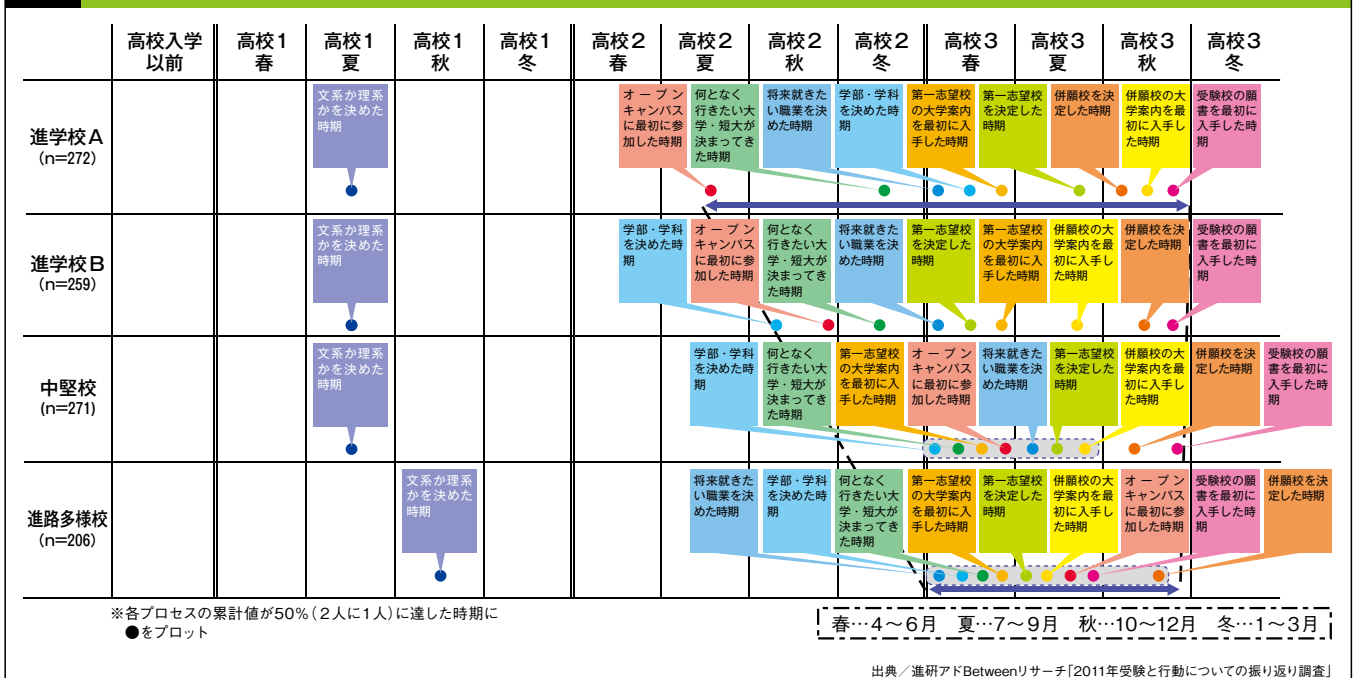
進学校Aは、まず「高校2年の夏」に「オープンキャンパスに初めて参加」し、「高校2年の冬」に「何となく行きたい大学・短大を決めた」。

進学校Bは、3か月遅く「高校2年の秋」に「学部・学科を決め」、「オープンキャンパスに初めて参加」し、「何となく行きたい大学・短大を

決めた」時期は進学校Aと同じ「高校2年の冬」である。大学が学力上位層の生徒を獲得するには高校2年生のうちに、オープンキャンパスなどの機会を通して大学のことを知らせ、行きたい大学の候補に挙げてもらうことが重要であるようだ。

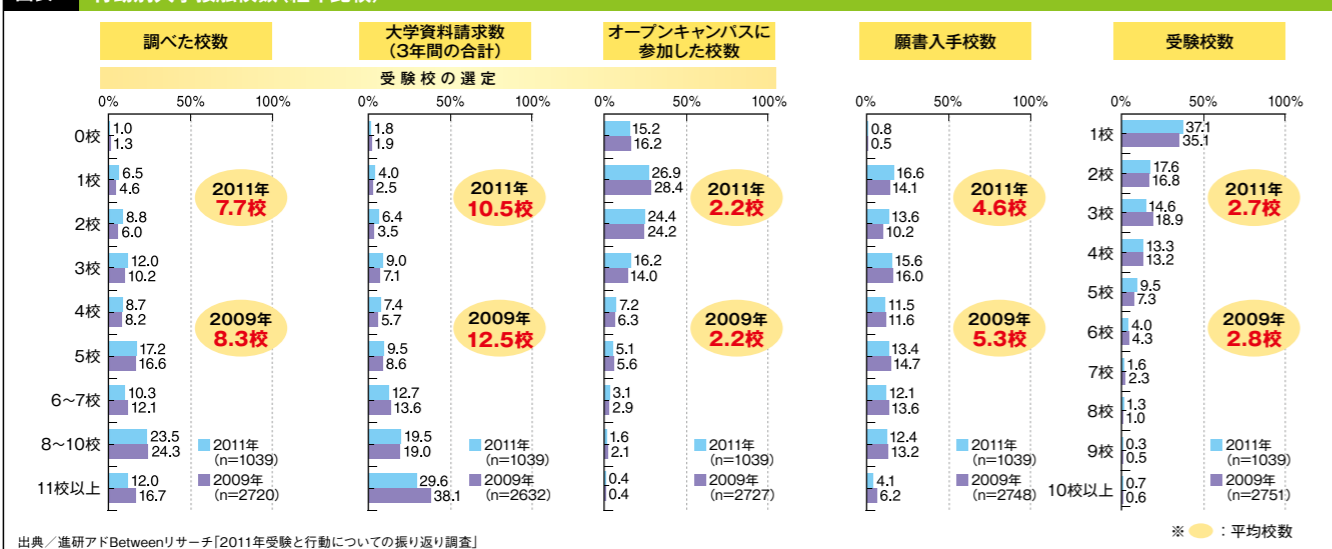
進学校Bが「第一志望校を決定した時期」は「高校3年の春」でどの区分よりも早く、その他の区分の「高校3年の夏」と3か月の差がある。進学校Aは「高校2年の夏」からよりじっくり進学先を選んでいる。中堅校や進路多様校では、進路選択のた

図表1 半数の高校生が進路選択のための行動を起こす時期(高校区分別)



変化 3 高校生・保護者の意識変化

図表2 行動別大学接触校数(経年比較)



めの行動を起こす時期が遅く、「高校3年の春・夏」に集中している。高校の進路指導では、まず将来の夢を描かせ、職業観を醸成させる。その後、その職業に就くために必要な学問について調べ学習をさせる。しかしこの調査結果を見ると、進学校Bと中堅校ではその順序で決定していない。これは前回(2009年)調査では見られなかった結果である。今回、高校区分ごとに見ていくと、進路指導時期に変化はないが、生徒の進路決定行動のタイミングはこのように多様化していることがわかる。

調べる大学の数は減少傾向に

図表2は高校生がどれくらいの数の大学の情報を収集し、最終的に受験したかを、前回調査と比較したものである。受験校を選定するうえで「受験前に何校の大学・短大を調べたか」は7.7校で、情報収集する大学の数が0.6校減少している。次に「大学案内や学部・学科のパフレットなどの資料を何校入手したか」は、前回調査と比べて2.0校減少の10.5校

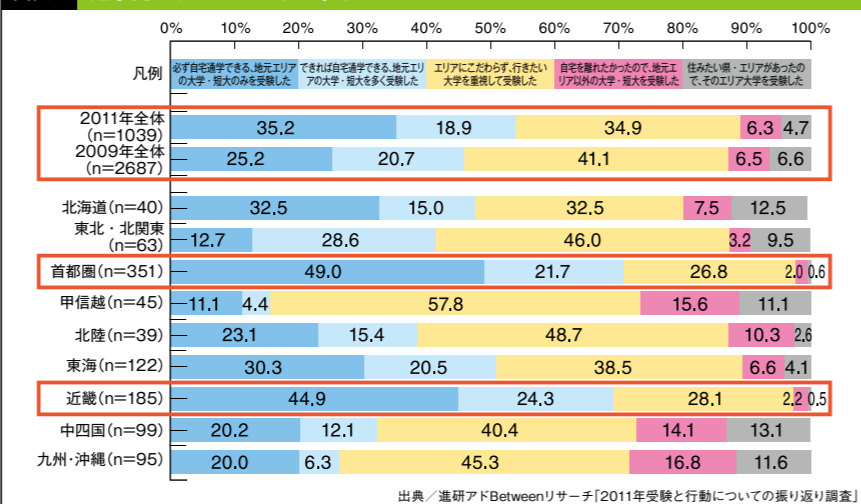
となっている。ただ「オープンキャンパスの参加校数」については、2.2校と変化がなかった。2010年7~8月に進研アドが実施した高校生調査で、オープンキャンパスの役立ち度を聞いたところ、87.7%（「とても役に立った」+「まあ役に立った」）と高い。情報収集する大学の数が減少傾向にある今、オープンキャンパスにまずは来てもらうための戦略が、より重要になっているのではないだろうか。実際の受験行動では、「願書入手校数」は4.6校と、やはり前回調査に比べて減少しているが、最終的な受

験校数については2.7校と、ほとんど変化が見られなかった。

自宅通学希望者は8.2ポイント増

図表3は、受験校を決めた際の進学先エリアについての考えを、卒業した高校のエリア別に分析した結果である。「必ず自宅通学できる、地元エリアの大学・短大のみを受験した」が35.2%と前回調査を10ポイント上回り、「できれば自宅通学できる、地元エリアの大学・短大を受験した」

図表3 進学先エリアについての考え



図表4 保護者と子どもの受験校決定時重視項目

項目	保護者		子ども	
	受験校を決定する際重視すること (高校2・3年生保護者対象n=2576s) (%)	(%)	第一志望校を決定した際の決め手 (大学1・2年生n=2576s) (%)	(%)
1 学部・学科で学べること	58.1	50.9	42.4	42.4
2 将来就きたい仕事の内容が学べるか	57.8	30.7	35.2	35.2
3 子どもの成績と合否判定	47.9	30.3	31.3	31.3
4 大学生活にかかる費用	43.7	29.4	26.8	26.8
5 就職実績・状況	42.2	27.2	26.5	26.5
6 家から通学が可能か	40.9	24.2	26.1	26.1
7 学校の施設や雰囲気	37.3	22.7	21.7	21.7
8 合格目標偏差値	35.9	20.7	18.7	18.7
9 入試科目	27.0	20.1	17.6	17.6
10 資格取得	26.9	17.3	14.7	14.7
11 就職支援・キャリア支援	23.8	16.0	13.2	13.2
12 立地の良さ	20.0	15.3	12.1	12.1
13 入試倍率	19.4	12.0	11.2	11.2
14 知名度(大学の、学部の)	19.3	11.3	7.7	7.7
15 奨学金について	19.0	10.9	6.6	6.6

を合わせると地元志向が半数を超えた。エリア別に見ると、「首都圏」や「近畿」など大都市圏でこの傾向が顕著だ。

総務省の家計調査によると、消費支出に占める教育に関する支出は、2005年を100とすると、2009年1~3月期が100であったのに対し、2011年1~3月期は85.9まで減少しており、緊縮傾向にある。強い地元志向の背景には、経済不況によるこうした家計の悪化もあると思われる。

エリア別の経年比較を見ると、「必ず自宅通学できる、地元エリアの大学・短大のみを受験した」が減少したエリアがある。それが東日本大震災の被災地「東北・北関東」と「北陸」で、それぞれ2.8ポイント、3.4ポイント減少した。

就職と学びの関係は保護者がより重視

子どもや保護者は、受験校を決定する際、何を重視しているのだろうか

か。図表4は、保護者には「子どもの受験校を決定する際」、子どもには「第一志望校」と「併願校」に分けて、重視したことを聞いた結果である。保護者、子どもが共に最も重視しているのは「学部・学科で学べること」である。

保護者は、「将来就きたい仕事の内容が学べるか」についても同じくらい重視しており、半数以上であった。次いで「子どもの成績と合否判定」「大学生活にかかる費用」と、現実面を重視している。

子どもは「第一志望校」に関しては、保護者同様に「将来就きたい仕事の内容が学べるか」が2番目に高いが、重視率は30.7%と保護者に比べるとそれほど高くない。「学校の施設や雰囲気」も同程度が重視しており(30.3%)、キャンパスライフを楽しめる雰囲気も今の高校生には重要な要素のようだ。「併願校」については、学部・学科以外は「成績と合否判定」「入試科目」「合格目標偏差値」などが上位にあり、実際に合格できるか

どうかという視点で大学選びはなされている。

震災後、東北では立地の良さを重視

東日本大震災は進路選択にどのような影響を与えているのだろうか。

震災前に4年制大学への進学を希望していた人で震災後も同じ進路を希望しているのは99.6%で、ほとんど変化がなかった。また「受験校を決定する際に重視することは、震災発生の前後で変化した」という回答は全体では1割を下回った。ただ、震災後「立地の良さ」の重視度は、全体で6.2%だった中、「東北」は13.1%と高くなっている。緊急時の安全な避難や帰宅が重視されるようになったのは間違いない。

今回の調査結果からは、震災の影響はそれほど認められないが、小さな変化を見逃さず、高校生の意識と行動を受験まで見続けることが重要である。

調査概要

調査1 Betweenリサーチ「2011年受験と行動についての振り返り調査」
 ■調査主体:進研アド ■調査方法:インターネット調査 ■調査時期:2011年4月~5月
 ■調査対象:2011年3月高等学校卒業生(福島・宮城・岩手の3県を除く全国) ■有効回答数:1039名

調査2「大学進学に関する調査」
 ■調査主体:ベネッセコーポレーション ■調査方法:インターネット調査 ■調査時期:2011年5月
 ■調査対象:高校2・3年生、大学1・2年生とその保護者 ■有効回答数:高校生とその保護者/2576s、大学生とその保護者/5152s 合計7728s